

養護施設職員(保母)の生活と人となり

——ホスピタリズムス・其の二——

前田 栄
吉沢 英子
三年 生

本誌第一集——ホスピタリズムス・其の一——に保母の児童に与える影響はどうか、即ち保母の生活からの諸問題の分析を試みた。

今回は、更にその保母自身のパーソナリティについて、サーストンのテストを用い既述の生活上の問題点との比較、関連を考察してみたいと思う。

全国養護施設一四カ所(東京が特に多い)の保母五八名に對し、記入法により一九五四年夏期休暇に帰省の際当学科三年の学生有志が郷里の施設で行なつたものである。

テストの操作及びまとめにあつては、秋山欣江、金井明子、工藤静枝、本山孝子、奥井郷子五氏の特に熱心な協力を得た。

一、サーストンのテストについて

サーストンのパーソナリティテストは、性格の外面的なも

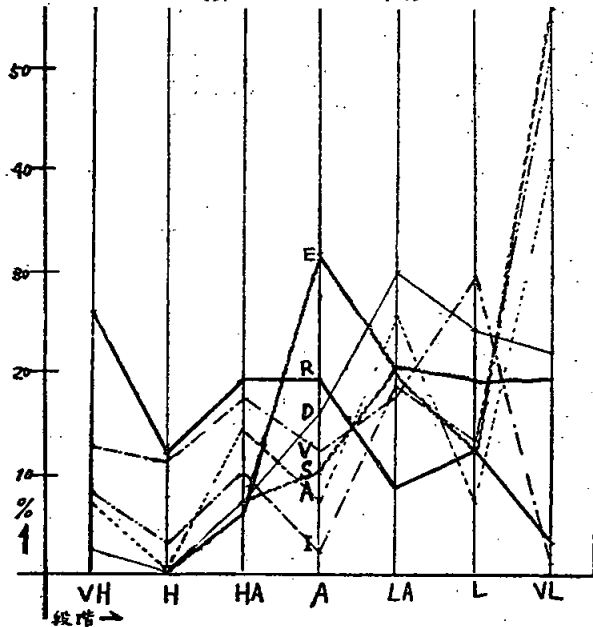
の、即ち普通一般に外攻性、内攻性とかいわれるものを端的に表現されるものである。Activity, Vigorous, Impulsion, Dominance, Emotional Stability, Sociability, Reflexiveness, の七項目について検査し、それらが標準に對してどの程度の高低を示すか、それによつてその人の性格の概観を知ることが出来る。日本に於ては国立精神衛生研究所ではじめられてから日尙浅く、未だ改良されていないため、日本人には多少不向きな点もあるが、標準を下げて前回調査のパーソナリティの面からの裏付けをするために、概括的な傾向を知る手がかりとして今回用いることにした。

オ一表

年齢	%
10才代	17
20才代	43
30才代	24
40才代	4
50才代	2
不明	10

第一表に示した年齢別表では、二〇才代が四三%と約半数を示めていることは、この年代の女性が、この職につ

〔第一 図〕



いっている率が大きなのである。テストの結果は第一図に示す通りで、この図から概括的に次の様なことが言ひ得よう。

- (1) 物事に対する積極性に非常に乏しい。
- (2) 内攻的な性格をもっているものが多い。即ち反省性が高。
- (3) 社会性に非常にかけている。(一般に日本人は低い)

更に低く)

- (4) 衝動性が非常に低く。
- (5) リーダーシップがあまりなく。
- (6) 活潑性はやや標準に近く。

以上は、全体としてみた場合で、これを年齢別にみると一〇代では社会性に非常に乏しいものが七〇%、殆どが最低の位置にあり、年長になるに従ひ社会的接触の範囲が大となり、当然であるが三六%に減じてきている。同じ傾向は反省性に於ても明らかである。これと逆の傾向は、活潑性の非常に高いものが一〇代では四〇%、二〇代では五%、三〇代で一四%となつている。情緒の安定性は年長ほど安定を多く表わし、物事に対する積極性は一〇代には殆どみられない。

註 1 活動性——物事に対する積極性

2 活潑性——運動等身体を動かす方面の積極性

3 衝動性——良い意味での種々な事に興味をもてるか或いは、物事に感じ易い

4 支配性——所謂リーダーシップの有無

5 情緒安定性——周囲の環境によつて自己が乱される

6 社会性——社交性、外攻性であるか否か

7 反省性——学者的なものと陰險な内攻的な反省

を意味する二通りがある

二、勤労条件との関連

表二

	Acti- vity	Vigo- rous	Impul- sion	Domi- nance	Emoti- onal Stability	Socia- bility	Ref- lec- tive- ness
Very High 90—100	4	7	4	1	0	0	15
High 80—90	0	6	2	0	0	0	7
High Average 60—80	8	10	3	4	6	4	11
Average 40—60	4	7	1	9	18	3	11
Low Average 20—40	15	10	10	17	12	12	5
Low 10—20	4	17	7	14	11	7	7
Very Low 0—10	23	1	29	13	11	33	2
Total	58 (人員)						

全国婦人労働者の平均給与の約半分にしか当らない保母の給与、十六時間から終日の勤務時間が長いこと、休養、娯楽の時間の不足即ち自分の自由時間の不足等からの影響が手伝つてか、或いはその様なパーソナリティを有する者が保母になる傾向があるのか明確でないが、悪条件の下に働くことによ

る特徴的傾向として、内攻的で物事に対する積極性の不足の結果を如実に示しているのではなからうか。衝動性が低い、即ち勤務時間の長いことにより過労、自由時間の少ないことによる自分の生活上の問題と施設の方針との板ばさみの立場ともなり自己の不满、悩みを内部に潜入させ心的葛藤の連続という型になる。その中で慢性的状態から、あまり何事にも興味をもつことが出来なくなり、従つて熱意も固定して了うのではないかと思われるのである——勿論よい意味の物事に動じやすくなく、冷静な落着きあることを表わしているとも考えられるのであるが——

三、保母の人となり——仕事に対する態度——との関連

(1) 保母の生活歴・生活環境

前述した如きテストにあらわれた特徴は、前回調査の際の生活歴や、生活環境から生じていると言ふ事が出来る。即ち① 幼児時代の躰が嚴格であつた者が約半数あること。② 精神的外傷を四〇%が持つている事等により外攻性が抑えられ、内攻的となつてきているのではなからうか。また現在の生活環境については① 宗教を半数以上持つているために、反省の機会を多く持つ様になり、やがてその間隔が縮められると共に、習慣付けられてくる事により反省性が高くあらわれ

てくる。
② 趣味に読書が最も多い処から、今回テストの結果とあわせ考えてみると、情緒安定の面が助長されていると考えられ

よう。

(2) 仕事に対する態度及び意識

以上の如く保母自身の性格が、内攻的性格である事は、自分の不幸な経験から児童に同情し、それが犠牲的精神へと置き換えられたものが動機となつて就職した者が多いと考えられる。愛情の対象を児童に求めるため独占的愛情を児童に与えることがあるのではなからうか。

テストの結果にあらわれた社会性の低さは同僚間の不和を起しやすい。しかし生活上、児童と直接に触れ合う事から、児童に対する態度、家庭的雰囲気をつくる事の面に欠陥が生じるとも考えられる。これは児童への欲求不満を起させる原因ともなる。

将来の職業の継続について考察してみると、継続したいという情熱を持つているものが六〇%ある事は喜ばしい事実である。これは前述の就職の動機に於てもみられたごとく、自分の精神的外傷と同じ不幸な状態にある児童との間の運命と結び付いて、奉仕の精神という型に置き換えられたとみられる。その結果、職業的に認められるよりも保母が、はぐくみ育てては若き生命のある事を知つて、自身の悪条件を超越する事が出来るのであらうと推察出来る。

四、まとめ

(1) 保母は職業柄、活動性が最も要求されているのに対し著しく低い。この保母の下に生活している児童への影響は見逃し得ない。

(2) 内攻的な性格からの児童との誤つた愛情の結び付きによ

り、将来児童、保母自身の対人関係の不都合さを招く恐れがありはしないか。

(3) (2)に關連して当然あらわれる結果であるが、社会性に乏しいことは、保母自身の施設内のみ生活がそうなさしめているといつても過言ではない。

また一方、施設職員の人手不足からの過労不満等のハケ口を自分の内部に潜めていくことから、多くの施設に於て、就業時間が長く、給与の低いため、保母が児童の養育に必要な液測とした明かるとい生活を送ることは容易なことではない。こうした無理な、不自然な生活の連続は、保母自身の性格をゆがめてゆく原因ともなり、同時に、児童のパーソナリティの形成に悪影響をもたらさずにはおかない。

以上のことから、対策の一端として、

(1) 施設長と、内部の従事者、また従事者相互において、話し合いの機会を度重ねて気軽にもち、その関係を円滑にする。

(2) その地域との関係をもつようにする。職員自身が進んで地域内に侵入してゆける様な雰囲気をつくる。——施設内外共に——。

(3) 各施設の従事者相互の連絡をとる機会をつくり建設的批判意見の交換が出来る様にする。

(4) (1)―(3)の事が出来る時間的余裕をもてる様にすること。職員勤務条件の合理化、同時に研究的熱意をもちうる場をつくる。

等が一般に考えられる。